

♪「テレム・カルテット」コンサート ぶらり訪問記♪

日 時 2010年7月3日(土)15:00 開演

会 場 神奈川県民ホール・小ホール

演奏者 バヤン: アンドレイ・スミルノフ

ソプラノドムラ: アンドレイ・コンスタンチーノフ

コントラバラライカ: ミハイル・ジューゼ

アルトドムラ: アレクセイ・バルショフ

7月2日(金)東京銀座の王子ホールを皮切りに「テレム・カルテット」が全国ツアーを行なっています。私は地元、神奈川県民ホールでの演奏を聴きに行きました。

プログラムには、2005年愛知万博で来日とありますが、全国ツアーとしては2度目の来日とのことでした。

「テレム」とは、ロシアの伝統的な木造の家(丸太で造られる)のことだそうです。

最初の曲は、シューベルトの「セレナーデ」静寂の中、かすかな女性の歌声が会場に響き渡る。実際に歌っているわけではなく、「ソプラノドムラ」と「アルトドムラ」の掛け合いによる音の重なりが、あたかも女性コーラスのように客席には聴こえていたのです。日頃聴いたことのないドムラの音色に不思議な世界へと引き込まれていきます。

オープニングの「セレナーデ」もそうですがロシアの民族楽器による四重奏なので、プログラム全体が原曲のメロディーを活か

しながらロシア風の香りで包まれていました。バヤン奏者の編曲だそうです。

コントラバラライカは、ベースの役割をしているのですが、絃を支えるこまがフラットなのでギターのように指もしくはピックで弾くだけで弓でこすることは出来ません。ドムラもそれほど大きな音は出ないのでバランスとしてはいいのかもしれませんが。

4種類の楽器で、せせらぎを表現したり、木々のざわめきや不安な心を表現したり、弾む気持ちだったり、風の音だったりそれはみごとでした。

日本では「猫踏んじゃった」で親しまれている「蚤のワルツ」では、テレム・カルテットのメンバー一人ひとりの演奏力の高さとチームワークが活かされていて、コミカルで笑ってしまいますが、とっても質の高い演奏でした。演奏者の顔の表情はとても大事な要素なのということがよくわかります。会場から“ブラボー”の声が出ていました。

今回のツアーが室内楽のように比較的小さなホールで行われる意味が理解できました。

二部の途中から、小林靖宏氏が加わり、オリジナル曲「初恋なのに人見知り」他、バヤン奏者の編曲したピアソラの「リベルタンゴ」、日本でザ・ピーナッツが歌い流行し、ロシアでもヒットした「恋のバカンス」など、テレム・

カルテットとのセッションでこれも楽しめました。アンコールが終わっても拍手が鳴り止みませんでした。写真はチラシより転写。

(乙津:記)



